

北川透 編集・制作〈ひとり雑誌〉

KYO 峡

詩と批評の現在へ



創刊号

2013. 9. 1

「KYO (峡)」創刊のことなど

新しく「KYO」という雑誌を刊行することになりました。いつからか、もう自分では雑誌を出すことはないと思っていましたが、急に、もう一回、というより、自分にとって最後の雑誌を出したい、という気持ちで忽然と湧いてきました。まだまだ、書きたいものがある。なりふり構わず、思う存分、自由に書いて、誰にも何処にも気兼ねなく発表したい。そのためには、われひとり行く場所を作り出すよりほかないな、という思いでした。

そこには、これまで同人として寄稿していた「詩論へ」と、「耳空」が相次いで終刊したことも、いくらか関係しているかもしれない。それぞれ終刊にいたる不可避の事情があり、いずれも同人たちは、なお、余力を残しながらの退場でした。

われながら不思議でした。最初は遊び半分、もしいま、雑誌を出すなら、どういうやり方があるかを空想していました。しかし、いつのまにか本気になっている自分に気がついたので、

です。一九六二年八月、浮海啓と二人で「あんかるわ」を出した時の気持ちだが、甦ってきたのでした。あれから五〇年以上が経っています。「あんかるわ」を一九九〇年十二月に八四号まで、約二八年間、出し続け、いよいよこの雑誌の先が見えなくなつて終刊したのでした。翌年、三月には下関に引越しをしました。

わたしはこれまで、雑誌に関わることで、自分の表現を活性化させてきたような気がします。これまで同人になった雑誌だけでも、「菊屋」「恐龍大図鑑」「九」「詩論へ」「耳空」最近では「歷程」があります。その他、同人ではないが、毎号、依頼されて寄稿した雑誌が何冊もあります。「あんかるわ」を含めて、これらはすべて性格が違う雑誌です。わたしの関わり方も違っていました。同じ性格の雑誌ならやる必要がないし、やる気も起こりません。「KYO」はこれまでわたしが一度もやったことのない性格の雑誌にする積りで、まず、とりあえずは自分の表現、主として詩と思想的な課題を追求するために、その場所を確保することが前提です。当面、誰とも同人を組まず、寄稿も投稿も受け入れる余裕がありません。という点で、先にあげた、

これまでわたしが関わってきた、沢山の同人雑誌とは異なります。

この吹けば飛ぶような片々たる〈ひとり雑誌〉が、現在の詩や文学の中で、どんな戦略的な位置を取ることができるかは、分かりません。ともかく、自分にとっては、最も力を尽くした最高の表現を目指し、現在の状況にとても切実な課題を追求する表現を、ここに発表して行きたい、ということだけを考えたい。こんなわたしの発言も、滑稽に見える立場があることは、十分承知していますが、いつこうに構いません。いまはわたしがこの〈ひとり雑誌〉に希望を見出し、大きな楽しみの中にあることがすべてです。

「KYO」の誌名については、下関の関門海峡から〈峡〉を貰いました。山と山の狭間、あるいは裂け目(クラック)を往還する激しい潮流。その中を行く木の葉のような小さな舟……。 「KYO」は今日や橋だけでなく、凶や狂にも通じますから、いつ難破するかわかりません。わが小舟もすでに相当老朽化しています。しかし、なお知力、体力が続く限り、ボロボロになるまで、季刊のペースで出していきたいと思っています。ご購入の支援をいただければ幸いです。

伝奇集 1

北川 透

ハルハリ鳥徒然抄

* ウエーキッピー

その小さな鳥では鳴き声が
すべて生き物の名前と化している
ハルハリ ハルハリという鳴き声があれば、
磯辺に棲息するハルハリがそこにいる
ヒトヒトブリース ヒトヒトブリースという
響りが聞こえるので空を見上げれば
嘴の鋭い怪鳥ヒトヒトブリースが
黒い大きな翼を広げて 獲物を狙っている
ゾオゾラゾラ ゾオゾラゾラと鳴くのは
草叢に潜んでいる 赤い毒蛇ゾオゾラだ
深夜の闇の中で鳴く蛇は 世界に例を見ないだろう
この鳥では野性の雄鶏も スットントンと呼ばれる
彼らは捕獲を逃れようとして スットントンヒーヒー
スットントンヒーヒーと悲鳴をあげるからだ

海岸線に沿って巨大な岸壁が海に競り出している
岸壁もゴリイックリクと啼くので
ゴリイックリクと呼ばれる
打ち寄せる波もダールジェンサーと呼ばれている
島のどこにいてもダールジェンサー
ダールジェンサーと波の啼き声が聞こえる
人もまたウエーキッピートお互いに呼び交わしている
今夜もまたダールデンサー ダールデンサーの合間に
ウエーキッピート ウエーキッピート
咽び泣く声が聞こえる しかし彼らは
泣いているのではない
笑っているのだ
ウエーキッピート ウエーキッピート

*** 先住民

ハルハリは頭が扁平で 左右に細長い耳が垂れている
吻が耳まで幅広く切れていて 首は太い
胴長でお尻に毛深い尾が丸まっている
大人になったハルハリの体長は
約一メートル 体重は四〇キロくらいでずんぐりしている
丈夫そうな前脚が二つ 後ろ脚が二つ
四足は体壁から横に突き出ているが 内側に曲がっている
ハルハリは水陸両棲の哺乳類だから
海に入ると この四本の脚が魚類の前鰭後鰭の役目をする

陸上では のたりのたりとしか歩けず 動作は緩慢だ
雄は数が少なく あまり見かけない

発情期は一年に春秋二回ずつ 月夜の晩だ

その時期が来ると 雌は雄を求めて暗い渚を

ハルハリ ハルハリと啼きながらさまよい歩く

雌はオスよりも体格がよく 身体も一回り大きい

交尾中 雌はひときわ高い声で鳴き続けるが

その時はハールハンハリイ ハールハンハリイと

いつもと違って うたっている調子に聞こえる

雄はいつもグーグー唸っているだけで啼く習性がない

ハルハリは赤ちゃんを一度に五、六匹産み

一匹だけ残して 後は残らず 食べてしまう

ハルハリはウエーキッピーを恐れない

彼らはこの島の先住民だからだ

*** 病い

その島のウエーキッピーたちは

見るからに病んでいて

鼯のように痩せこけていて

いつも長い首を垂れて歩いていて

大きな四角い箱の中に棲んでいて

痛い 痛い と楽しそうに泣いていて

痛い 痛い とうめいていて 楽しいのか辛いのか

二つの声は同一のウエーキッピーとは思えないが

多重格ウエーキッピーとも思えず

四角い箱は分裂し 支離滅裂となつてもかまわず

痛いねえ 痛いねえ あんた

痛いねえつて 楽しいねえ 苦しいねえ

四角い箱が 転がつたり ぶつ潰れたり

いかに苦境に立たされていても

ウエーキッピーたちは笑うべき時に 泣き

泣くべき時に 笑っているが

彼らの使う仰々しい形容詞は 血の気を失い

行間はたるんで 意味を超えようと焦る

海馬が 時々 頭の中からこぼれて喘いでいる

皺くちやの手袋のように

たいそうくたびれているものの

死ぬ気配も 絶滅する気配もない

ウエーキッピーたちは 時々 思い出したように

飛んだり跳ねたりしている

*** 匂い

匂いは鳴かないので名前を持たない 名前を持たないものは特定でき
ないが ハルハリ島ではあらゆるものが強烈に匂っている 慣れ
てくると しだいに感じなくなるが 消えるということはない ウ
エーキッピーの女が結婚しているかどうかは その匂いで判別でき
る 最初に性交した後の女陰の匂いが 彼女から生涯消えないから
だ スカンクの臭いは強烈だが 彼は攻撃されなければ悪臭を分泌

しない。しかし島のあらゆるものが放出する匂いは、四六時中島を厚く覆っている。雨が降ろうが、風が吹こうが、匂いが消えることはない。島の匂いが始末に負えないのは、夢の中まで侵入してくるからだ。夢の中で大きな黒い手に掴まって、断崖から突き落とされた時も、声なく真つ逆さまに落ちていく間中、島の匂いは身体を包んでいた。そして、谷底で悲鳴をあげて飛び散った後も、ばらばらの肉を鳥が突つつきに来た時も、匂いは消えることがなかった。

***** 重い領域

重い領域が、ハルハリ島ではまだわずかに生き残っている。親しいパンダを、打つものとして存在しようとすれば、重い領域は、長時間、潜水するイルカにならねばならぬ。残念ながら、浮揚する力にこてんぱんに追い上げられ、重い領域も、また、ぶかぶか浮いている。発泡スチロールの白波、クジラさん、助けておくれ、マンボーさん、ハルハリ島の嫁ごはな、わしの思うようにはなってくれぬぞよ、ハルハリハルハリ、ウエーキッピ―

***** 信仰

ハルハリ島の純潔ハルハリ教団は朝起きると、東の岬の先端に集い、海から昇る黄金のタトラバッチイに手を合わせる。

タトラバッチイはタトラバッチイ　タトラバッチイと
笑いながら　昇った

彼らは夕べには西の岬の先端に集い

真赤な海に　タトラバッチイ　タトラバッチイと

泣きながら沈んでいく　タトラバッチイに祈る

純潔ハルハリ教団ではパラパパイも

ピラピラパイも不要だった

彼らは自然の力に従順であり、逆らうことを知らない

彼らはあらゆるもののギャンギャンを祝うが

スーミリヤテットラカンを恐れない

彼らの内部では　ことばは不要だった　無言の合意が

タトラバッチイの意志であり　よろこびだからだ

オウギヤラデーもなければ　アルメンゴッコリもない

ニヤスメエジーもなければ　トルトリナンキーもない

ハリハリ島の純潔ハルハリ教団は　植物のように

動物のように　飢え渴く幸福に　充たされている

彼らのうち選ばれた者だけが

タトラバッチイに会うために

夕陽の海に投身することが許される

序章 最後の根本的問題 吉本隆明の死とその後

北川 透

一 危ない橋を渡る

吉本隆明が亡くなったのは、二〇一二年三月十六日二時十三分。満八十七歳だった。それは東北地方三陸沖を震源とする大地震と、それに伴う最大級の津波が起った二〇一一年三月十一日から、一年後という時期だった。つまり、彼は東京で、その地震を経験し、その後一年の間に起こったことを、老いた身体と病気に悩ませられながらも、力の限り思考し、思想的に検証しながら、世を去った、ということだろう。被災地から遠方に生活するわたしは、地震や津波を報ずる映像や記事に、ことばを失うほかなかったが、後に二万人と伝えられる、膨大な死者や行方不明者のおおよその数さえ、一年経っても確定されることがなかった。それは地震と共に発生した大津波に、多くの人が海に流され、住民の生死を特定できなかつたからだ。被災地の農業や産業に与えた被害の甚大さも、時とともに明らかになっていったが、当初は瓦礫の散乱する荒蕪な津波の跡の映像の凄まじさを、ただ無言で見詰めている他なかった。

しかし、この大震災の被害の性格を複雑にし、わたしたち

を不安と恐怖に曝したのは、地震や津波の影響による福島第一原子力発電所で発生した炉心溶融、放射性物質の放出という、原子力事故が起ったからだった。これによって、これまでのわたしたちの自然観、都市や農村の生活の在り方が、あらためて問われたばかりではない。東京電力の無責任な対応や隠蔽体質、政府の無能無策など、政治や経済の御都合主義に左右されている、原子力発電の問題点や危険性が顕わになったのである。近代以来の科学文明の発展について、根本的な思考や反省を強いられないわけにはいかない。

吉本隆明の訃報が伝えられたのは、その動揺がまだ収まらないどころか、むしろ、容易ならざる事態が明らかになっていった時期だ。それを幾らか具体的に言えば、炉内の冷温停止を維持したりするための注水その他に使われた放射能汚染水は、毎日、四〇〇トンずつ増え続け、その処理の対策も立っていなかったし、情報は錯綜していた。廃炉の困難や放射能被害が土壌や動植物、魚貝類に及んでいることが明らかになり、特に子供たちの健康への不安が増幅し、拡大している時期でもあった。

吉本の生涯の思想の特徴の一つは、わたしたちが緊要な課

題とする社会的な事件が起きた際に、必ず、みずからの原理的な立場を鮮明にする発言をしてきたことだった。晩年、特に病気で足腰が不自由になってからも、この思想の性向は変わらなかった。そこには吉本の敗戦期の体験も影響しているだろう。たとえば、彼は敗戦後のどう生きてよいか分らない混沌の中で、自分が敬愛していた文学者たちが、何か言ってくれたら生きる支えになると切望していたのに、彼らのどんな見解も、聞くことができなかった、という。その時に、彼がひそかに自分と取り交わした約束は、『じぶんがそんな場所に立つことがあったら』、自分の考えを、『できるかぎり率直に公開しよう。それはじぶんの身ひとつで、ふきつさらしのなかに立つような孤独な感じだが、誤謬も何もおそれずに公言しよう』（『大情況論』「あとがき」というものだった。この自分に対する約束は、最後まで破られることがなかった。もつとも、ジャーナリズムが、混沌を極める思想状況の中で、常に明確な旗印を掲げる吉本を放つてはおかなかった、ということもあるだろう。

後から考えると、亡くなる二か月前だったことに慄然とするが、そんな時期に、『週刊新潮』（二〇二二年一月五日・十二日号）は、原子力発電の今日的な課題について、〈吉本隆明二時間インタビュー〉を掲載したのだった。この〈発言〉は、福島事故以来、反原発について高まりを見せていた世論の動向を、真っ向から批判する内容になっている。そこに彼の考え方についての是非を越えて、最後まで吉本隆明らしい立姿が見えると言ってもよい。先の彼のことばで言えば、『ふ

きつさらしの中に立つような孤独』が感じられる。しかし、原発事故以来、一年も経ていない時期において、現実に居住禁止区域の設定で、居住地から追い出された被災地や被災者の恐怖や苦境を、ほとんど考慮しない発言は、多くの批判に迎えられることになった。わたしはまず、インターネット（Facebook等）上の吉本非難の風聞から、そのおおよその意見を知り、強い危惧の念を抱くことになった。

しかし、実際に「週刊新潮」の記事を読んでもみると、吉本の発言の忠実な記録というより、『「反原発」で猿になる」という、本文の主張とは反する、センセーショナルな見出しに示されているように、編集サイドのかなり主観的な（まとも）になっていく（インタビューアーの名前すら記されていない）印象を得たのだった。しかし、こうした反応を引き起こすことが、原理的な思考を重んずる吉本思想の本来的な特徴でもあること、それを思えば、『週刊新潮』が、吉本の発言を故意に歪めたとはかりは言えないだろう。

ただ、原理的な思考と硬直した原理主義とは違う。「週刊新潮」の記事も、吉本みずからが、『元個人』の立場で語っていることを主張しているように、原理的ではあっても、原理主義とは言えないだろう。しかし、放射能漏れや汚染水など、簡単に処理できない深刻な事態が進行している最中に、『事故では被害が出ているし、何人かの人は放射能によって身体的な障害が生じるかもしれない』ということを経く言い過ぎている。また、『人類が積み上げてきた科学の成果を、一度の事故で放棄していいのか』（傍点＝北川）と言うよ

うな不正確な発言もある。いまさら言うまでもないが、世界を震撼させた事故は、一九八八年四月、ソビエト時代のウクライナ、チェルノブイリで起っている。それ以前の重大事故は、一九七九年三月のアメリカペンシルベニア州のスリーマイル島原子力発電所のそれが有名だ。わが国でも、一九九九年九月の東海村JCO臨界事故は被曝による死者が出ているし、二〇〇七年新潟の中越沖地震の際に、柏崎原発で火災が発生した事故も、まだ記憶に生々しい。

一々あげないが、決して一度や二度の事故ではない。このことが、問題を深める吉本の思考の前提になっていない。だから、交通事故との安易な比較も出てくる。そして、《そのために損害が出たからと廃止するのは、人間が進歩することによって文明を築いてきたという近代の考え方を否定するものです。》と主張される。誰が考えても、交通事故と国家戦略として進められる原発とは、次元が異なることは明らかだ。ここではそれ自体では否定し得ない原理的思考が、著しく進化論的な原理主義に引き寄せられていることが感じられる。彼が亡くなって、雑誌の追悼号に、夥しい吉本隆明論が書かれた。そのことは後で触れるが、吉本の〈反・反原発〉の主張に触れたものの中で、一瞬、息を飲んだものに、築山登美夫の「吉本隆明と原子力の時代」（『飢餓陣営』38号）があった。そこに高村光太郎が生前最後に書いた「生命の大河」（一九五五年十二月十九日作、「読売新聞」一九五六年一月発表）が引用されていたからだ。わたし自身、この作品が気になっていたので、吉本の〈反・反原発〉の思想に触れる時に、問題に

しようと思っていたが、築山がこれに注目して論を立てていることを知って眼を見張ったのだ。やはり、詩人でなければ、これへの着目はないだろう。彼は岡本太郎「ヒロシマ63」や宮澤賢治「断章」七など、自然のエネルギー讃歌ともとれる作品と並べ、広い視野で吉本の原理的な考え方の普遍性を焙り出そうとしているようにも見える。「生命の大河」の第四連はもともと、吉本が『高村光太郎』（五月書房版、一九五八年十月刊）の最後に、引用しているものだ。それをこ

こでも引く。

科学は後退をゆるさない。

科学は危険に突入する。

科学は危険をのりこえる。

放射能の故にうしろをむかない。

放射能の克服と

放射能の着用とに

科学は万全をかける。

原子力の解放は

やがて人類の一切を変え

想像しがたい生活図の世紀がくる。 （『生命の大河』第四連）

「週刊新潮」の〈反・反原発〉の主張より五〇数年前に書かれた、この光太郎の詩は、ほとんど吉本の従来の主張と変わらないことに、いまさらながら啞然とする。彼が『高村光太郎』でこれを引いた後、《わたしはこの自然のメカニズムを

非情な己れの「眼」とした詩人の、最後のモデルニスムに敬意を表することにしよう」と述べて、一冊の光太郎論を閉じたのも宜なるかなである。しかし、わたしはこの科学の万全をかけた未来信仰の詩が好きではない。日本が国会で原子力基本法を成立させ、日本原子力委員会を設置したのは、一九五五年十一月である。この時から、原子力の平和利用が現実的な政治課題となった。しかし、光太郎の詩「生命の大河」が書かれたのはそれより二年前だ。それが可能になった環境は、築山が指摘するように、一九五二年十二月に行われた、アメリカ大統領アイゼンハワーの国連総会の演説ではないか、と思う。それは核競争による軍備増強ではなく、その破壊的な力を、《すべての人類に恩恵をもたらす偉大な恵み》、つまり、平和利用に転換するというものだ。わたしはこの詩の光太郎を、オポチュニストとは言わないが、《自然のメカニズムを非情な己れの眼》とした近代主義者とも思えない。まだ、広島・長崎への原爆投下の恐怖が生々しく、そして、日本では平和利用の何ごとも始まっていない時期に、原子力平和利用の楽天的な未来図と、それへのいささかの屈折もない信仰告白が述べられているだけだからだ。この達者な詩的形式を支えているものは、宗教的な感情であつても、詩ではないのではないか、と思えてくる。

高村光太郎と言えば誰もが思い浮かべる「道程」という詩がある。わたしは「生命の大河」を読むと、《ぼくの前に道はない／僕の後ろに道は出来る／ああ、自然よ／父よ／僕は一人立ちにさせた広大な父よ／僕から目を離さないで守る事

をせよ》という「道程」に、これが似通っていることに気づく。この詩の初稿は無駄な枝葉を削ぎ落した、こんな完成品の姿をしていない。例えば、過去の道は《何といふ曲りくねり／迷ひまよつた道だらう／自堕落に消え滅びかけたあの道／絶望に閉じ込められたあの道／幼い苦悩にもみつぶされたあの道／振り返ってみると／自分の道は戦慄に値ひする》（「道程」初稿）というように内省されている。萩原朔太郎は高村の詩を、《どこかストイックの風貌があり、情緒の奔躍な流出が抑圧されている》（「大正の長詩鑑賞」と的確に評した。たしかに「道程」においても、絶対の父としての自然の発見から、迷い、錯乱、自堕落、絶望、恐怖の《道程》の内在過程の一切が削り落とされ、その抑圧の上に、倫理的な至高点だけが示されている。この方法が《モデルニスム》の否定による、ストイックな厳しさを持った、高村の愛国的戦争詩への起点であることは言うまでもない。高村生涯最後の詩「生命の大河」は、《放射能の故にうしろをむかない》方法において、「道程」の方法と似通っている。

しかし、原子力を手にした科学は、破滅的な惨禍をもたらす原爆を作りだす、という危険に突入した。それを乗り越えるためには、何度もうしろを振り返り、立ち止まり、危険を避ける万全の策を講じなければならぬのは当然だ。それこそ一歩前進、二歩後退を繰り返さなければ、原子力の平和的利用の道など開けてくるはずがない、と思うべきだ。大事故があれば、その原因の究明や除去のために、原子力発電の十年、二十年の停止があつても構わないではないか。一切の迷いの

過程をきれいに消した「生命の大河」は、アイゼンハワー大統領の演説という、政治的背景なくしては書かれえない詩だ。戦後始まった米ソ冷戦の中で、核の軍拡競争にそれ以上耐えられなくなってきたアメリカ（とソ連）は、戦略的な原子力平和利用の路線に行かざるをえなかったのだ。むろん、大量の核兵器を温存しながらである。その現実を見ない、光太郎の科学万全信仰は、愛国詩・戦争詩が戦後において、平和を仮装している姿ではないか、と疑っても、短絡したことはないだろう。

わたしはいくらかよそ道に入り過ぎただろうか。しかし、わたしがこのことにこだわるのは、吉本が《原発を巡る議論》のなかに、入っている〈恐怖感〉を否定しているからだ。《恐怖感というのは、人間が持っている共通の弱さで、誰もがそれに流されてしまいがちです。》と語られている。ここは吉本が強調しているにもかかわらず、あまり、誰もが注意しないとこだ。わたしは吉本が、晩年、詩を書かなくなっても、詩人であることを疑わなかった。しかし、恐怖感を、こんな風に否定しては詩人でなくなってしまうのではないか、という眩きがわたしの中に湧き起ってきたのだ。恐怖感、人間が弱さなのかどうか。それは弱さであっても、同時に強さでもあろう。なぜなら、人間は恐怖感によって危険を感じたり、回避したりすることができるからだ。

近代的理性にとつて、恐怖感とは説明できない不条理な感情である。しかし、この不条理な感受性なくして、詩人は世界の危機や陥穽を、人より先駆けて感知できない。全

体主義に対する恐怖。謂われなく差別する人間や機構への恐怖。抑圧的な権力への恐怖。原発の安全性神話が崩れ、しかも、その後の東京電力や政府の対応を見れば、原発への恐怖感を抱かないでいることは難しい。それは人間の正当な感覚だからだ。科学も技術も政治・経済も、この正当な恐怖感を受け止めなくして、安全性を構築できるとは思えない。恐怖を排除する理性の言語は、権力に回収されざるをえないだろう。それは詩とは対極の論理だからだ。

そう思いながら、わたしはなぜ吉本が、恐怖感ではなく、人々のそれを組織している共同性、あるいはシステムを批判しないのだろうか、という疑いを持った。人々が恐怖感を持つのは正当である。しかし、その恐怖感を反原発に組織する、イデオロギー的な共同性の中には、単にムード的なものではなく、ぞつとするような狂信的なものがある。ここでは原発を唱えることが理屈抜きで真であり、正義であると言った問答無用の宗教に近い信仰が潜んでいる。吉本は恐怖感を売り口上にした、宗教的な共同性を批判している、と思いたい。それなら理解できるし、共鳴さえ覚える。しかし、ここでは吉本の論理はそういう風には働いていない。わたしが深い危惧に陥ったのは、吉本が言いたる理性的（原理的）な理屈の中では、恐怖感そのものが、人間の弱さとして否定されてしまっているからだった。そこからは詩人の声が聞こえてこない。それを消したのは「週刊新潮」という、作爲の場所ではないか、と思った。

むろん、吉本の実際の発言を、編集サイドが原発推進のお

のれの作為によつてまとめた、とまでは言えないだろう。しかし、週刊誌というセンセーショナルな効果を期待している場所が作りだす、不可避的な論理のブレが、そこに生じているのではないか、とわたしは疑わざるをえなかった。そう思うのは、吉本の〈3・11〉に関する発言はこれだけではないからだ。もう一つのインタビューによる発言「これから人類は危ない橋をとぼとぼ渡っていくことになる」と比較してみたらよい。もとより、両者に同一の内容が多いが、こちらの方が簡潔でありながら、遙かに深い内容を持つているし、吉本の真意もよく表現されている、と思う。題名からして、『「反原発」で猿になる』は、いかにも週刊誌的な厭な臭みがあるが、『これから人類は危ない橋をとぼとぼ渡っていくことになる』の方は、恐怖を影のように従えて生きていかざるをえない〈人類〉の心細さがよく出ている。それは一行の詩のような啓示を湛えているではないか。

わたしがこれを読んだのは、うかつにも「週刊新潮」の記事より後、「文藝別冊」の追悼号「さよなら吉本隆明」(二〇一二年五月三〇日)によつてだった。しかし、驚くのはこのインタビューがなされているのが、大震災の四〇日ほど後という早い時期の、二〇一一年四月二十二日だったからだ。大日向公男によるインタビューに答えたものだが、初出は『思想としての3・11』(河出書房新社、二〇一一年六月二十一日)である。詩的啓示に満ちているのは、むしろ、題名だけではない。インタビューアー大日向公男のよく準備された問いかけが、吉本のよく考えられた洞察を引きだしているとも

言える。ここでは一箇所だけ、『原理的な言い方』をすると断つた上で語られている、次の部分を引いておきたい。

原子力はそれを最終的には戦争に使うために貯蔵することも、また多面的な利用もできるし経済的な利を得るために開発することも、見方を変えればいくつもの目的があるわけですが、もっとも根本的には、人間はとうとう自分の皮膚を透過するものを使うようになったということですね。人間ばかりでなく生物の皮膚や骨を構成する組織を簡単に透過する素粒子や放射線を見出して、物質を細かく解体するまで文明や科学が進んで、そういうものを使わざるをえないところまできてしまったことが根本の問題だと思えます。それが最初でかつ最後の問題であることを自覚し、確認する必要があります(これらから人類は危ない橋をとぼとぼ渡っていくことになる)

《人間はとうとう自分の皮膚を透過するものを使うようになった》という発言は、原子力が発電だけでなく、レントゲンなど病気の発見や治療においても、広範囲に用いられるようになってきていることをも指している。同じような言い方は、『週刊新潮』の発言でもなされているが、そこではもっぱら恐怖感と関係づけられ、それは科学技術を阻害する悪役としてしか捉えられていない。しかし、「これから人類は……」の方は、恐怖感という、ことは自体がそもそも一度も出て来ないが、素粒子や放射線を使うようになって、恐怖感と共存

してしか生きられなくなった人類の行く末が見据えられている。

よく知られていることだが、原子爆弾は人類を何度も滅亡させるだけの保有量（核保有国五カ国の公称核弾頭数三三二五個）が維持されたままだ。保有国、つまり、核（不）拡散防止条約（NPT）で、特権的に核保有が認められているアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国はそれを減らす努力をいまだに怠っている。それは先にも触れたように、この条約を推進した大国の目的が、これ以上の核競争に経済的に耐えられないという前提がある。それが故にコスト削減はしなければならぬが、それと同時に、核保有の寡占状態の永続化という、彼ら共通の身勝手な世界戦略に基づく願望がそこにある。NPTを批准しないで核保有をしているインド、パキスタン、北朝鮮等があり、さらに北大西洋条約機構の中の核共有国にドイツ、イタリアなど四カ国がある。平和利用を隠れ蓑に増え続ける、核保有の疑わしい国はイラン、シリアなど数カ国に及ぶが、日本だってこれまで、アメリカの核の傘の下に入ってきたし、いまは公然と核保有を主張する石原慎太郎のような政治家も現れている。保守政治を牽引している最右翼の、憲法改正後の次の課題は核兵器の所有だろう。現実のパワー・ポリティクスの中では、原子力の平和利用と、自国利益優先の核兵器の開発、その技術水準の向上、保有、他国への恫喝は、複雑に入り組み、絡み合っている。原発推進の根柢を、「週刊新潮」の吉本の発言のように、こうしたパワー・ポリティクスの関係磁場から切り離して、科学技術

の発展は後戻りできないという、単眼的原理だけでは、わたしたちの恐怖心の根にあるものを捉えきれないはずだ。

言うまでもなく、これは人類が最後の根本の問題に直面し、それを避けて通ることができなくなった、ということでもある。技術的には同一レベルだから、原子力の平和利用が可能な国なら、核弾頭も作り出せる。この危機感が「週刊新潮」の（発言）では感じられない。しかし、「これから人類は……」の吉本の発言は、ヒステリックに恐怖心を否定する論理がないだけ、詩人と科学者が一体化している、吉本本来の語り口を感じさせる。原子力発電についても、『利用する方法、その危険を防ぎ禁止する方法をとことんまで考える』ところに人類の文明がきていることを述べ、利用と同時に、『危険をできる限り防ぐ方法を考え進めないと、人間や人類は本当にアウトですね』、『人間は終わりが近づいている暗い悲観的なものです』という微妙な言い方もなされている。時間的には、「週刊新潮」の発言の方が後だけれども、わたしは吉本の最後の思想は、そこにはなく『これから人類は危ない橋をとほとば渡っていくことになる』という、詩的啓示に見られる危機感の表明の方にある、と思わざるをえない。

二 好奇心と〈世界視線〉

吉本隆明の死を知ったのは、当日（三月十六日）朝のインターネット（Facebook）においてであった。驚きと深い悲痛の感慨に沈んでいる内に、幾つかの新聞社の電話インタビュー

と、追悼文の依頼を受けたが、この日はほとんどそんな応対で暮れた。最初の長いインタビューは九時半ごろ、「毎日新聞」からだった。その応対の中で依頼されて、すぐに書いた追悼文「冬の圧力の真むこうへ」(「毎日新聞」二〇二二年三月二十一日)を、次に引いておきたい。

吉本さんの計報を受けて、長い瞑目の時を持った。そして、あらためて吉本さんの生涯は詩人だった、と思う。

世界は異常な捷てがあり、私刑リンチがあり、仲間外れにされたものは風にふきさらされた

これは吉本さんの詩「少年期」の二行だ。少年期における仲間外れ。それを経験しないまでも、怖れたことのない人はいないだろう。詩人はこれを追憶として書いているのではない。家族、友人仲間から教団、党派、国家にいたるまで、人は様々なレベルの掟や法を内在させた、共同の関係から逃れられない。それを視野に置いた関係の違和、不服従、追放の惨劇をたどる少年期の原型を、ここに見定めようとしている。これと同時期の『転位のための十篇』や『固有時のための対話』などの詩集も含めて、吉本さんが、まだ二十代の半ばかり、三十代の初めに書いた詩篇が、いまに甦るのを感じるのは、東日本大震災後のウソのないことを求める状況があるからだろうか。それだけと思えないのは、吉本さんが、以後、展開する思想的・理論的なモティーフの強度が、ここに孕まれているからだ。

その逆の見方も、また、可能だ。吉本さんほど、詩や文学

が成立する土壌としての、基盤としての、自前の思想の構築に生涯を費やした詩人はいない。わたしは一九五七年、大学の四年生になった頃、初めて吉本隆明の著作『文学者の戦争責任』を読んだ。その昂奮がなければ、(旧)書肆ユリイカ版の『吉本隆明詩集』を求めることもなかった。それは凄本だった。わたしの詩や文学への甘っちょろい夢を吹き飛ばした。ヨーロッパ最先端の意匠で装うモダニズムの詩も、マルクス主義や、近代的な自我の詩も、戦争下においてすべて無惨に崩壊したという、戦慄すべき事態。そこでは、いかに新しそうでも、いかに恰好よく見えても、輸入された付焼刃の知識や感覚の遊戯、孤高を誇る自意識では、役に立たないことが語られていた。新しい知識や感覚自体が駄目なのではない。それを身につけようとする時、遅れた底辺の社会に浸透する法や制度、意識やモラルと格闘しながら、自前の思想、感覚、方法を身につけるたたかひをして来なかった、そこに日本の詩の脆さがある。それをしなければ、戦争詩や翼賛文学は繰り返される、という強い自覚、開眼。

ここから始まる一九六〇年以降の思想のたたかひ。確かに吉本さんは、詩「ちいさな群への挨拶」でうたったように、たった一人、手ぶらで『冬の圧力の真むこうへ』と出ていった。吉本思想のキー・ワード〈自立〉は、六〇年安保闘争における旧左翼との訣別・擬制の終焉から出てくるが、すでに五〇年代の詩のモティーフや、詩人の戦争責任を問う論理に内包されていた。そして、何ものからも独立する表現の場の確保のために、「試行」の創刊。そこにすべての党派的な文

学観を否定した、『言語にとつて美とはなにか』の連載。一方、戦争下において、ほとんどの詩や文学が、回帰していった庶民意識や国家の問題は、『共同幻想論』として原理的に探求される。さらにそれは意識と無意識、狂気と正気、悪はなぜ根柢を持つのかなど、心的現象のすべてを解明する終わりのない試みに引き継がれる。『心的現象論』、『最後の親鸞』等々。

わたしが吉本さんと「現代詩手帖」誌上で対談したのは、ソ連、東欧の社会主義の崩壊した後の世界認識を先取りして書かれた、『マス・イメージ論』と『ハイ・イメージ論』の中間、一九八四年の十二月だった。吉本さんが変質する高度資本主義のなかで、多元的な文化の在り方について、大胆な仮説を展開していた時だ。吉本さんについてのわたしの印象は、大きな耳を持った人。むろん、自説は、訥々とした口調ながらも、断乎として主張されるが、わたしなどのつまらぬおしゃべりにも、じっと耳を傾けられた。その感銘を思い起こしながら、「ちいさな群への挨拶」の二行を噛みしめたい。ぼくがたおれたらひとつの直接性がたおれる。もたれあうことをさらった反抗がたおれる。

〔冬の圧力の真むこうへ〕全文掲載時のまま

以上が、〈追悼文〉の引用だ。一人の傑出した詩人、批評家、思想家の死は、いつでも単なる死ではない。つまり、詩や思想の中絶や終わりではない。むしろ、新たな始まりでさえある。彼の詩や思想を動かしていた生命が、肉体の死を媒

介にして、というよりも、死の壁を突き破って語り出す、いままでも隠れていた可能性までが身を起して歩きだす、ということが起る。わたしたちが吉本隆明の死によって経験したことは、そういうことではないか。別に吉本に限らない。戦後について言えば、小林秀雄や江藤淳においても、詩の領域で言えば、鮎川信夫、田村隆一、吉岡實……などにおいても同じことを、わたしたちは経験してきたはずだ。それは詩や思想が、本来的に孕んでいるものが、個人という身体や場所に限界づけられながら、それを超えて生きようとするからだろう。

彼らに関心を持ったたり、表現の場を支えてきたりしたメディアが、〈追悼特集号〉を出すというようなことは通例だろう。そこで近しい関係の者が、生前の思い出、業績やその意義について、哀悼を込めて語ることも、しばしば目にしてきたことだ。そして、その直接の追憶や回想、感慨から、わたしたちは多くの感銘を受けることも確かだが、そこから零れ落ちた、あるいははみ出たところこそ、一層力強く死者の詩や思想の可能性、あるいは不可能性が語られることになるというのも実感するところだろう。そうすることで、知らず知らずのうちに、わたしたちは死者の可能性や不可能性こそを生き直そうとしている。大事なことは、それをわたしたちのものにするためにも、彼の死を思い出に閉じ込めたり、直接の交渉や影響を特権化したり、偶像化したりしないことだろう。

それにしても、吉本隆明の死は、今年、最大の〈事件〉だ

った、というようなことを、わたしは述べたことがないし、述べるつもりもない。わたしに〈追悼文〉を依頼してきた、ある新聞記者は、わたしたち（ジャーナリズム）にとつて、吉本さんの死は、今年の最大の〈事件〉になるでしょう、と言った。そして、新聞、文芸・思想雑誌は、彼のことば通り、最大の〈事件〉にした。むろん、わたしはそのことを非難しているのではない。戦後最大の思想家とか、もう二度と出現しない偉大な批評家とかいう、空虚な言説の下に、吉本隆明の死を〈事件〉にする、幾つもの不可避的な力が働いている。それがどこまで吉本の思想の内在性に基づいているのか、伝説や偶像を作りたがる見えない力のシステムに由っているのか、それに無自覚でありたくない、と思うだけだ。

実は、この文章をわたしはいま、「二〇一二年、吉本隆明の死」（現代詩手帖）二〇一二年十二月号）の全面的な改稿を指して書いている。改稿前の原稿は、吉本隆明が亡くなった年の年間回顧をする、十二月の〈現代詩年鑑〉に発表された。編集部はわたしにこの年に出た、〈追悼特集〉の形態を取って出された、多くの文芸・思想雑誌における吉本隆明論において、死を契機に、どんな新しい詩人像、思想家像が生まれているか、それを検討して欲しい、というような依頼だった、と思う。それでわたしを読んだ追悼雑誌は十数冊、それでもまだ全部ではないだろうが、それらはわたしが入ったもの、寄贈されたもの、思潮社から資料として送られたものもの総計である。その中には、詩人たちの同人誌「雷電」（2号）や、いち早く5月に出た沖繩の詩人たちの「Myraku」（12号）

などの〈追悼特集〉も含まれている。これは「南島論」以来の沖繩（の詩人）と、吉本隆明との強い結びつきをも映し出していた。他では一般に商業誌とは言えない佐藤幹夫の「飢餓陣営」（38号）、栗本慎一郎・三上治共同編集の「流砂」（第5号）などが、分厚いだけではなく、レベルの高い論を揃えた全頁の〈追悼特集〉を出すようなことも、吉本以外の詩人や批評家ではありえなかったことだろう。もとより、「現代詩手帖」（5月号は全頁、7月号も部分特集）、「現代思想」（7月臨時増刊号）、「中央公論特別編集〈吉本隆明の世界〉」、「文藝別冊」、「情況」（8月号）なども総特集だった。扱いは小さいが、「ユリイカ」、「群像」、「新潮」、「文學界」（いずれも5月号）も複数の〈追悼文〉を載せている。もとより、依頼がなくても、この吉本現象とも言うべき、〈追悼特集〉の総体が、詩（文学）や思想の現在と今後について、何を語ろうとしているのか。その一端を考えてみたい、とは思っていた。しかし、それに取りかかるきっかけを欠いていたので、編集部の依頼は渡りに船であった。

何が困難なのかと言えば、むろん第一にわたしは非力だからだが、この際それを置いて言えば、吉本の仕事が実に長期間、多岐にわたっており、それに応じて論者の関心も多様だからだ。戦中派では稀有のことだが、吉本は実に軽やかな好奇心の人でもあった。同時代で、これと双壁をなすのは、まったくその在り方は対照的だが、谷川俊太郎くらいしか思いあたらない。ただ、吉本の好奇心は、詩と科学、あるいは文学と哲学と言ってもいいが、その原理的な領域と深くかかわ

りながら、ということとは孤立を全く恐れないということだが、現代の高度情報化・消費社会において、変容する様々な欲望の形やマス・イメージに開かれていくことが特異だった。これあればこそ、彼の思想は、詩と科学、それに宗教という中心軸をめぐって、激しく旋回しながら、いつも賛否両論に割れる時代の波を被り、時に痛い傷跡をさらしながら、流動することができた。(3・11)以後の吉本最晩年の世界認識についても、先に触れた「これから人類は危ない橋をとぼとぼ渡っていくことになる」という、切実で確かな最後のメッセージには、詩と科学が絡まり合って旋回する吉本思想の性格を見ることができるといえる。

しかし、吉本の場合に危ないのは科学一元論(時に宗教一元論)になった時である。それは「『反原発』で猿になる」という、危ない発言に見ることができるといえる。そこでは先に見たように、詩的な発想が失われている。そうすると、非詩的な領域の視野も失われ、原発が単に科学技術の問題ではなく、核兵器所有さえ視野に入れている保守政権の動向や、政治的利権、経済的利益と絡み合って進行する全体への手触りが希薄になってしまふ。高村光太郎の詩に見られる、楽天的な科学信仰に通じる論理が猛威をふるうことにならざるをえない。吉本思想においては、最晩年だけでなく、時々こういう片肺飛行のようなことが起るが、その面にはすっかり目を奪われていると、様々な線引きや境界を軽々と越えていく、吉本本来の好奇心の視線が、「マス・イメージ」や「世界視線」というような概念に連動していることに気づくことができない。

雑誌特集のなかで、この面に触れているものは少なかつたが、日下部正哉「そして、像は転移する」(「雷電」2号)、安西美行「『吉本隆明 全マンガ論』からの縮合」、松本孝幸「吉本隆明・マンガ・自閉症」(いずれも「情況」8月号)などに、それらは見られる、と思う。

もとより、ここは一九八〇年代から始まった『マス・イメージ論』や『ハイ・イメージ論』を論ずる場所ではない。追悼特集の日下部正哉の論にいくらか触れる形で、僅かに垣間見るにとどめるが、そもそも変容する高度資本主義社会の不思議や未知、あるいは恐怖や不安と言ってもいいが、その現在の帯域が、言語の意味だけでは、うまくとらえられなくなつた、という吉本の現状認識がそこにある。しかし、もともとわたしたちが生きている世界を、みずからの視線で撫で、素手で触ろうとする好奇心を欠いて、(像)を喚起する詩を書き続けることはできない。詩が言語の意味の表現で充足するなら、論文や小説を書けばいい。詩はいわばその発生の初源から、理屈を越えた(像)やリズムによって魅入られている。ただ、ここで問題になつている(像)は、現在の資本主義の尖端的な科学技術が可能にしているレベルにおいてだ。しかし、吉本の好奇心は、この時期、たとえば宮澤賢治が『銀河鉄道の夜』において、彼自身が言う《闇の中に掲げられたマンダラ絵図》(「宮澤賢治〈近代日本詩人論13〉第二章」)を書いたように、今日的なレベルの像的な形象を、作品として試みる方向には行かなかつた。漫画やテレビCMの尖端的な水準の映像表現の分析や、限りなく遠方の宇宙から見下ろ

される（世界視線）のような（ハイ・イメージ）に文明史的な意義を探る方向に行ったのだった。詩人吉本が、同時に科学の人でもあるということは、宮澤賢治と同じ運命のもとにあったということだが、発現の仕方が違っている。

『ハイ・イメージ論』の中の「映像都市論」は、コンピュータ・グラフィックの〈高次映像〉を手掛かりの一つにして、現在の世界都市の姿を捉えようとする。ここで吉本が〈世界視線〉と呼んでいるのは、たとえば高度一二〇〇メートルの上空から垂直に見下ろされた航空写真のような視線のことである。これはランドサット（アメリカの人工衛星）から向けられた地球への視線も同じことだろう。そのようにして俯瞰される都市像は、高層ビルや小さな箱がひしめくような住宅街高架の高速道、緑地と空地、細い街路、河川……というように、高さ（距離）によって抽象化された図像のようなものではない。吉本はそれを現実そこに存在する生活行動を遮覆している〈表皮膜〉だとしている。〈世界視線〉の内部においては、《都市の外装の俯瞰図が「実在」の像であり、そこで生活行動をしている人々の姿は、想像力によってしか像をつくれぬ虚像なのだ》と述べられる。これが分かりにくいのは、吉本の論理が虚構と現実の関係を転倒させているからだ。誰も〈世界視線〉の俯瞰図が現実で、自分の生活行動が虚構などとは思わない。つまり、この俯瞰像はわたしたちの実感に反している。

まして都市のなかで生活行動している人々が、どんな内面

の思いをもち、どんな絶望や希望をいだいて行動し、労働し、恋愛し、遊び、嘆き、喜んでいかとうようなことは、虚像のまた虚像で、じつは考えてみるのだが、まったく恣意的で、まったく無意味なのだ。そこで世界視線からみられた都市像は、その都市が瞬間ごとに、自身の死を代償として自身の瞬間ごとの死につつある姿を上方から俯瞰している像に相当していることがわかる。その都市の内部で生活行動をしている人間のうち、この俯瞰図にかかわりがあるのは、この都市像の細部を、その瞬間に壊しつつあるか、改修しつつあるか、それとも附加しつつあるかに関わっているかぎりにおいてである。恋愛し、食べ、働き、遊んで、等々の都市人は、いわば世界視線からの都市像からは、遮覆され、あちら側の彼岸に生活しているものとみなされる。

〔ハイ・イメージ論〕「映像都市論」ゴシック体は原文のまま

この〈世界視線〉から見られた都市像に対して、吉本は実際に都市の内部で生活している人々が、水平に交わしあう眼差しを〈普遍視線〉と名づけ、また、高さからくる〈世界視線〉とは反対向きに、地上から上空を見上げる眼差しを〈逆世界視線〉と呼んでいる。日下部は、そのことを跡付けて、わたしたちの視線が〈三次元構造〉をなしている、と言っている。しかし、これは〈三次元〉なのだろうか。いや、それよりも前に、なぜ、上空から降りてくる視線は、〈世界視線〉と呼ばれるのだろうか。また、なぜ、人間の座高や直立の位置に平行する、現実的な〈像〉を捉える視線は、〈普遍視

線」と名づけられるのだろうか。吉本にあっては、〈世界視線〉は〈権力視線〉と呼ばれたり、〈普遍視線〉が〈生活視線〉と言ひ換えられたりしているが、わたしには、この〈世界〉とか、〈普遍〉という概念が、とても居心地が悪いような感じがする。それを〈権力〉とか、〈生活〉に置き換えても、居心地悪さに変りはない。なぜ、そうなのか。わたしは、この三次元空間の中に、時間が入ってきていないからではないか、と思う。航空写真やランドサットのカメラに映し出された都市の俯瞰図は、長い科学技術の歴史が可能にしたものだ。労働し、恋愛し、遊んでいる人間が間近に見たり、手で触ったり、臭いを嗅いだり、食べたりして得る、すべての環境的、内在的な像は直感的なものだが、それでも人間的な感覚は長い人類史の産物である。今日、科学技術によって、一旦、上空の高みから見ると抽象的な視線が、どんな都市像を作るか知ってしまった人々は、つまり、人類史的な感覚に、更に刺激的で強度な〈現在〉の変容を受けたことになる。人々は、もはや、この抽象的な視線と無関係に、周囲を眺めることはできなくなっているはずだ。その抽象化は虚構化と言っても同じことだが、その力こそが時間の働きである。そこで互いに働いている異次元の視線は、時間の作用をうけた〈四次元の構造〉をもっている、と言うべきだろう。

吉本は世界視線の都市像から見れば、そこから排除されている現実の生活行動は虚構だと述べているが、むしろ、その関係をさらに転倒する力を〈普遍視線〉や〈逆世界視線〉が持っていることは言うまでもない。〈普遍視線〉は、多義的

な比喩であり、高みから見下ろす〈権力〉の視線でもある。〈権力〉の視線が、都市の〈表皮膜〉である構造物や建築や高速道などに資本を投下し、生活領域の人間の営みや文化の生成に関心を持たなかったり、排除したり、画一化したりするのに対して、それは生活と文化の営みを振り所にして切り返す力であるわけだから、〈生活（力）視線〉とも〈文化（力）視線〉とも言えるかもしれない。しかし〈普遍視線〉はそのままで、自己を客体視することはできない。〈普遍視線〉は生活の識閥の中で働いている、生き生きした好奇心の働きが可能にしている眼差しであるが、しかし、それは空間的な高みだけでなく、時間的な距離が可能にする、抽象力でもある〈世界視線〉に拠らなければ、みずからの生活領域の在り方を組み換え、新しい都市像を作りだすことは可能にならないからだ。もとより、それは都市計画のレベルの問題だけではない。文学や詩の生きた都市像の問題でもあるだろう。

先の目下部分は、ここで《人間の個体が瀕死状態で経験する「自己客体視」の像が、一転して「都市が瞬間ごとに、自身の死につつまる姿を上方から俯瞰している像」にまで拡張される点》に注目し、《死に瀕した人間の脳に映ずる「自己客体視」が、なぜ都市の、つまりは社会の普段に変貌しつつある姿を極限から俯瞰しうる視線にリンクされるのか。》（そして、像は転移する）と問題を立てている。これは怖ろしいけど、楽しい問いだ。わたしはたちまち、中原中也の「羊の歌」を思い出す。《死の時には私が仰向かんことを！／こ

の小さな顎が、小さい上にも小さくならんことを！／それよ、私は私を感じ得なかつたことのために、／罰されて、死は来たるものと思ふゆゑ。／あ、その時私の仰向かんことを！／せてその時、私も、すべてを感じる者であらんことを！と、中也はうたつてゐる。

この《すべてを感じる》不可能な能力を、詩を書くという行為において信じたい。だから、わたしは吉本の臨死体験という奴が好きではない。実際にわたしは死に臨まなくても、自由にみずからの最期の姿も、死後の体験すら思い浮かべたり、想像したりすることができないではないか。都市もまた、みずからが死んでいく姿を、遠い上方にカメラを架設することで映し出すところまで来た。それはたしかに、瀕死者がみずからの死に行く姿を〈客体視〉することに、〈像〉としては同一化するとはできるだろう。しかし、中原中也は死に臨まなくても、死にゆく状態を想像し、その死は《すべてを感じる》ことができなかったから来た、とうたつてゐた。変容する都市だって、危険な事故を繰り返す原子力発電だつて同じことではないか。《すべてを感じる》ものである抽象力、それは《世界視線》や《普遍視線》が交差し、絡み合う磁場が存在するということでもあるが、それが失われたら、まさしく人類は破滅するほかないのである。わたしたちは生きるも死ぬも、いよいよ最期の局面に差し掛かってきた、ということだ。それを触知している、吉本の好奇心の動きが現在の理由はそこにある。

もうひとつ、これらの雑誌の追悼特集で気づいたことは、

編集者の発言が多いことだった。特にそれが「飢餓陣営」に集中していることから、これを編集する佐藤幹夫の手柄と見ているが、ここでは大出版社や新聞等マスコミから距離を置かれ（拒まれ）、あるいは距離を置いて（拒んで）、思想表現の場所を求める吉本を支えた、多くは小出版の編集者の考え方が興味深い。吉本の本を出すことには、信頼関係も含めて、編集者自身の思想が試されていたのだ。

これと関連して、もうひとつ言えば、他の批評家や作家と比べて、講演の記録の多いことも、編集者の努力に負っていた。吉本の場合、特に大学紛争の時代には、闘争の現場である大学やバリケードのなかの講演が多かったが、それを別にしても、直接、聴衆に語りかける講演という形が、一つの表現方法になつてゐる。吉本の講演の場所を追いかけて録音・再生し、一冊の本にすることの煩雑な作業を、自主的に引き受けた編集者の労苦は並大抵のものではなかつただろう。編集者たちの骨身を惜しまない協力の根底には、吉本の思想への理解と尊敬以外に、自立的な思想誌「試行」を、ほぼ三十年間、自力で出し続けた吉本の思想表現者として生きる姿勢への共感もあつたにちがいない、とわたしは思うが、一方、吉本の側はこれらの編集者の側をどう見ていただろう、ということにも関心がある。そのことはまた、別の項目を立てて触れることにしたい。

「序章」は、この後、「三（宗教的なもの）をめぐって」、「四（自己表出）」という概念と続くが、この二つの節は、次号に掲載される。



他者が現れる場所

千通りの名で呼ばれ振り向き……

北川 透

フィギュールとか、フィギュアということばを、眼にすることが多くなつた。もつとも、フィギュア・スケートなら、以前からおなじみのことばだが、さまざまの意味で使われる。たとえば人形、つまり、人の形を模したものの、姿、図像、図形などがそれだ。八柳李花の詩集『明るい遺書』（七月堂）を読んでいたら、『……わたしの顔というフィギュール、その在り処。』ということばが出てきて立ち止まつた。

変質してゆく僕からだ輝いて輝いて暗く軽くなつてゆくむぎ出された自身のうちに君の名を読み取つた、朝、顔を洗う水にうつる瞳に古い鏡の肉片を拾い出して僕ら、過去に笑ひあつた。（『明るい遺書』部分、原文は横書き）

この詩集には、「安川奈緒へ捧ぐ」という前詞がある。安川は昨年、フランス留学中に、二十八歳の若さで自死した詩人だ。わたしの詩集『海の古文書』の書評を書いてくれたことがある。詩人たちの集まりで三回ほど会つたことがあるが、個人的に交流があつたわけではない。しかし、留学直前の三月、大阪で開かれたある出版記念会では、彼女は自分の方から積極的に話しかけて来た。懇親会でも隣に来て、若い詩人

たちのことを喋つた。しかし、八柳が安川と親しい友人だつたらしいことは、この詩集を読むまでは、知らなかつた。

詩を書いている八柳は女性だ。だから、語り手〈僕〉の像も、〈僕〉に呼びかけられる〈君〉も、八柳や安川からは、ずれている。明るく暗く軽く変質する〈僕〉のうちに見出される〈君〉は、名でしかない。顔を洗う水に映る瞳から、あるいはそれは瞳という鏡なのか、そこに映っている過去に笑い合つた、〈僕ら〉が拾い出される。後半は文脈や意味自体がずらされて、イメージが拡散するように書かれている。しかも、全篇横書きで、活字が極端に小さい。この詩集の中の僅かな部分だけ見ても、フィギュールが様々にずれたり、入り組んだり、ぼかされているのが感じられるだろう。

これとほとんど同じ時期（本年3月）に、鷺田清一の『〈ひと〉の現象学』（筑摩書房）が出ている。鷺田は『モードの迷宮』以来、わたしが注意して読んできた哲学者だ。ここでも顔のフィギュールの考察から、鷺田現象学は語り始められている。他人と対面して話をしている時、わたしたちは自分がどんな顔をしているか、見るができなしいし、意識もしないで、相手と喋っている。鏡で見たり、写真に撮られて見る顔と、それは違うはずだ。わたしたちが知っている自分の顔は、単に画像であり、フィギュールでしかない。このわたしとわたしの画像のずれを、鷺田は《そこには大きな亀裂が走っている》と書いている。では、対面している時、わたしは相手の顔を見ているだろうか。たいていは、ちらちらとしか見ていない。眼が合うとどきまぎして、慌てて眼差しをそ

らす。だから、対面した相手の顔を、別れてからはおぼろにしか、あるいはほとんど具体的に思ひ起こすことができない。

わたしの前に現れている顔は、あやふやな消え入りそうな仮象であり、むしろ、現れていないものだ。鷺田が引用しているE・レヴィナスのことばを借りれば、『隣人の顔は表象から逃れる。隣人の顔は現象性の欠損にほかならない』。むしろ、すべての顔は、特殊な「わたし」の現象であり、安易に存在のメタファーとして、一般化してはならないだろう。ただ、名前は顔の代りをする。顔によって、「わたし」が区別されるように、名前によっても差異づけられる。わたしたちは鳥や魚を見ても、容易に区別できない。ことばで名付けることによって、初めてそれらは個別的な姿を現してくる。それがいかなる存在であるかは、その出現が欠損に他ならないような顔や名前、仮象や図像を手がかりにするほかない。

わたしたちは他者の痛みを感じることができないだろうか。小浜逸郎は『日本の七大思想家』（幻冬舎新書）の中で、大森荘蔵の哲学を論じて、彼が自らの著作の中で、このことを繰り返して述べている、という。わたしは大森の哲学を知らないが、たしかにわたしたちは他人の痛みを、自分の痛みのように感じるができない。しかし、それにもかかわらず、なぜ痛みを感じようとするのか。この問いの方が大事だ。それはわたしが存在するということが、わたしが生きる上で、関係づけられている、複数の他者性として現れること以外ではないからだ。それはわたしを『鉄壁の孤独』（大森荘蔵）

の中に囲い込むことではない。むしろ、孤高や孤独の超越的な鉄壁が壊れるところ、つまり、わたしが他者として開かれる場所こそ、その痛みは感じられようとする。その手掛かりとして、どんなに頼りなく、消え入りそうな姿をしていても、そこに顔があり、名前があり、ことばがあり、さまざまなしべルのフィギュールがある。

矢内原伊作をモデルにして、およそ肖像という概念を打ち消す肖像画を描いたジャコメッティについて、鷺田は書いている。『消すことが描くことの大半であるような作業。たえざる修正、たえざる描きなおしとともに、顔は整ってゆくどころか逆に消えてゆく』。この場面こそ、ジャコメッティは、仕事『《進んでいる》』と語ったという。詩を書く、という行為に似ているな、と思う。特に、八柳李花の『明るい遺書』は、いわば追悼詩という概念を消すことによって、つまり、わたしとあなたの顔を消すことによって、「僕」と「君」の存在の痛みを現そうとしているように見える。ジャコメッティの人物の彫刻が、極端に細く貧しい一本の針金になったように、八柳のことも野線のように痩せることによって、存在の痛みに近いこととしている。以下の引用、先と同じく原文の横書きを縦書きに直した。一行の字数も異なる。

僕は僕の自死のなかをゆっくり降りてゆく不慣れた足場に何度も深層を踏みぬき音を失った熱い沈殿を散らしながら口汚く数えあげた千通りの名で呼ばれ振り向き……

針踏みしここから先は真昼闇
遺書捨てて咲き乱れてるよ戦場が原
空の下発狂しているねカテドラル
流れゆく一羽の小鷲と水死人
ばんばばば天の川にて溺れてた

あとがき

「KYO（峡）」創刊にあたり、必要なことを書きます。まず、これは北川透が執筆し、みずから編集・発行する季刊の詩と批評の雑誌です。発行月は9月、12月、3月、6月。

直接購読を基本とします。
一冊の売価は送料含んで400円。予約購読される方は、5冊分2000円ご送金下さい。もし、終刊することがあれば、その号より先の予約金は、必ず、返金します。最初は宣伝のために、幾らかの寄贈をさせていただきますが、号を重ねることに、寄贈分をなくし、最終的にはゼロにする積りです。この雑誌を手にとったり、見たりした方が、以後、予約購読して下されば有難いです。

本誌やわたしの表現について、感想・ご意見・ご批判等は、いかなるものでも歓迎します。必要だと思えば、お答えしますが、誌面に掲載することはありません。また、作品等の投稿も、お受けできません。誌面（経済）的にも、実務（時間）的にも、それだけの余裕がないからです。ご理解ください。

直接購読者が100名に近づけば、かつて思想的にも交流の深かった、畏友、菅谷規矩雄、松下昇からの書信やそれに類するものを、連載で掲載できます。そのためには、発行費の基盤が安定することが不可欠です。資料の整理と、著作権などの困難の解決のために、少し時間もかかります。これはわたしの以前からの宿題ですし、少しでも余力がある内に実現したい、と考えています。

この雑誌の制作には、デザイナーとDTPスキルに練達した、加藤邦彦さんの全面的助力を受けています。それがなければ、ただのわたしの空想に終わるところでした。わたしのパソコンから、原稿を送り、それが加藤さんの編集ソフトを通して、見事なサンプルとして戻って来た時の、驚きと感銘は忘れることができません。そのことをここに記すことで、お礼に代えたい、と思

います。

最後に、20世紀最後の4年間、隔月刊の詩誌「九」を共同編集した、山本哲也のことを思い起しました。もう彼が亡くなつてから、5年が過ぎてしまいました。彼は他にかけてえのない同志でした。彼が存命でも、共同でこれを出したかどうか分かりませんが、力になってくれたことは確かです。いまま「九」の延長で、彼が喜んで支援してくれていると感じています。「ひとり雑誌」と言っていますが、本当はひとりであるわけがありません。無数の見えざる手によって、この雑誌は刊行されます。（2013・7・5）

北川透編集・制作（ひとり雑誌）
KYO 創刊号

二〇一三年九月一日発行

編集・発行者 北川透

〒七五二―〇九九七

下関市前田町一―一五―三三

前田コーポラス四〇四

DTP 加藤邦彦

印刷 東京カラー印刷

価格 四〇〇円（送料込）

